

# 青 あおに 白 鬼

<sup>まよ</sup>迷いの<sup>もり</sup>森とヒグラシのなく<sup>こえ</sup>声

ノプロプス  
noprops / 原作

くろだけんじ  
黒田研二 / 著

すずらぎ  
鈴羅木かりん / イラスト

## 卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

## ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。

## たけし

南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイヤツ。

## タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているという事実を知ったひろしの提案で、モールス信号を応用し、言葉を伝えられるようになった。

## 美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。



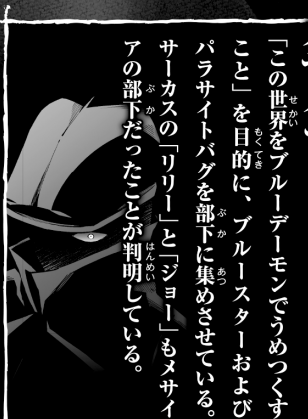
# 怪物



ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所での怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

## メサイア

「この世界をブルーデーモンでうめつくすこと」を目的に、ブルースターおよびパラサイトバグを部下に集めさせている。サーカスの「リリー」と「ジョー」もメサイアの部下だったことが判明している。



## ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは伯父・姪の関係。



## ジョー



## リリー

## ハルナ先生 せんせい

ひろし達が通う北部小学校の教師。生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。クロさんの悪事を知り、ひろしたちに協力してくれる。行き場を失っていた親友のユズキを迎え入れ、家で一緒に暮らしている。



## クロさん

メサイアの元で「カマロ」という名前で仕え、ブルースターを集めていた。ジェイルハウスでのひろしとの会話がきっかけで、メサイアに協力することをやめ、今は独自に行動しているようだ。



## ユズキ

ハルナ先生の同級生として碧奥小学校に通っていたが、パラサイトバグを誤って口にしてしまい、ブルーデーモンになった。現在は力をコントロールできるようなうになり、人間だった頃の姿にも変身できる。



## イズミさん

いまは美香の家で飼われているシーズー犬・マロンを販売していたペットショップの店員。自称・情報通で、いろいろなうわさ話を知っているようだが、あやしい行動が多いためタケルは警戒している。



# 目次 もくじ

1	全人類ブルーデーモン化計画 <small>ぜんじんるい</small>	007
2	銀世界へようこそ <small>ぎんせかい</small>	017
3	イズミさんとマロンちゃん	028
4	シロウサギを追いかけて <small>お</small>	039
5	ウサギとカメ	050
6	ロビーでばったり	059
7	迷いの森 <small>まよ</small>	068
8	展望レストランにて <small>てんぼう</small>	078
9	湯けむりの向こう側 <small>ゆけむり</small>	086
10	ヒグラシの鳴く雪山 <small>ひぐらし</small>	096
11	五頭のアスキー犬 <small>ごとう</small>	105

---

12	リフトの上のふたり <small>うへ</small>	116
13	予期せぬ事態 <small>よき</small>	126
14	消えたふたり <small>き</small>	137
15	〈迷いの森〉の怪物 <small>まよ</small>	151
16	ハラサイトバグの秘密 <small>ひみつ</small>	167
17	タイムリミットは午後七時 <small>しちじ</small>	179
18	マリアちゃんの警告 <small>せいこ</small>	189
19	ゴンドラのわな	204
20	たのもししい助っ人 <small>すけ</small>	218
21	悪夢の始まり <small>あくむ</small>	228
	ひろしによるなぞの解説 <small>かいせつ</small>	238



# あらすじ

顔見知りのペットショップ店員・イズミさんに誘われて、  
〈うらみスノーリゾート〉にやってきたひろし君、卓郎  
君、美香ちゃんと飼い犬のマロンちゃん、たけし君、ナ  
オちゃん、そしてぼく——タケル。スキーやスノーボード  
といったウィンタースポーツや犬ヅリ体験、雪遊びを  
思い思いに楽しむなかで、ぐうぜん、有名な動画配信者  
に出会ったんだ。彼らは、スキー場ととなり合うスギ林の  
「不気味なうわさ」を調べに来たみたいなんだけど、とん  
でもない事件が起きて……!?

# 1 全人類ブルーデーモン化計画

ジェイルハウスを取り囲む高い壁の前で立ち止まると、ジョーは念入りにあたりを見回した。路地に人がげはない。

隣接する化学工場が閉鎖して以降、人通りは少しずつ減っていたが、ジェイルハウスにブルーベリー色の化け物がすみついていてといううわさが広まってからは、一部の物好きを除いて、この一帯に近づく者はほとんどいなくなってしまうた。

好奇心旺盛な連中の侵入を防ぐため、館の所有者は壁の上には有刺鉄線を張りめぐらし、入り口の鉄門にはがんにようなくさりを巻いた。

だが、そんなものは超人的な肉体を持つブルーデーモンにとつてなんの障害にもならない。ジョーはあたりにだれもいないことをもう一度確認すると、軽く両ひざを曲げて宙にとび上がった。そのまま高さ三メートル以上の外壁をゆうゆうと乗りこえる。

ジェイルハウス内の広大な庭は雑草が生いしげり、ジャングルのような様相になっていた。冬になれば自然にかれるかと思っていたが、そんなことはまったくなく、むしろますます元気にな

つているようにさえ思える。

もしかしたら、メサイアの気を浴びて活力を得ているのだろうか？

ジョーはそんなことを考えた。決してとつびな発想ではないだろう。彼自身、どれだけつかれていても、メサイアの言葉を耳にすれば、それだけで元気になることができた。

メサイアは想像を絶するスピリチュアルな力を持っている。永遠の生命と強靱な肉体を手に入れることができたのも、すべて彼のおかげだ。

メサイアと出会っていないければ、今のジョーは存在しなかった。とつくの昔に野垂れ死んでいたにちがいない。

——私と共に、このくさりきつた世界を変えていこうではないか。

メサイアを信じ続ければ、いつかきつとかがやかしい未来が訪れる。

ジョーはそう信じて疑わなかった。

自分の身長をはるかにこえた雑草をかき分け、玄関前まで移動する。

玄関口には二台の監視カメラが備えつけられていた。この館の所有者が最近設置したものだ。

たびたびおかしな事件が起こるので、警察のすすめもあつて取りつけたらしいが、こんなものは外壁の有刺鉄線と同様、なんの意味もなさない。警備会社にばれぬよう撮影データをリアルタイ



ムで書きかえることなど、メサイアの力を使えばかんたんだった。

入り口のとびらは絶対に破られないという電子キーでロックされていたが、これもメサイアの手にかかればなんてことはない。ジョーが取っ手を引っ張ると、ドアはあつけなく開いた。

ジェイルハウスの中はキレイにかたづいていた。掃除も行き届いていて、ほこりひとつ落ちていない。

くつをはいたまま、館内に入りこむ。くつの裏に付いていた庭の土が廊下にこぼれ落ちた。

廊下沿いにならぶドアのすき間からアメーバ状のブルーデーモンが姿を現し、こぼれた土の上におおいかぶさる。ぞうきんがけでもしたみたいに、アメーバの進んだあとは土がなくなりキレイになつていた。

「いつもすまないな」

ジョーはアメーバに小さく頭を下げると、廊下を左に折れ曲がり、先へと進んだ。

真つ白なドアに設置された電子パネルに四けたの数字を入力して、地下へと続く階段を下りる。そのまま、冷たい空気がただようトンネルをまっすぐ進んだ。

メサイアが待つ〈大極殿〉はこの先にある。

〈大極殿〉はメサイアに選ばれた者しか立ち入ることのできない神聖な場所だ。メサイアがトン

ネル内の空間をゆがめているため、この屋敷に忍びこんだ人間たちが〈大極殿〉を目標したとしても絶対に到着することはできない。

うす暗いトンネルをくぐり抜け、ロマネスク風の古めかしい洋室内を通過する。〈大極殿〉はその先にあつた。

鼓動が高鳴る。ジョーは左胸をおさえ、呼吸を整えた。ここへやつてくると緊張が止まらなくなる。それはいつものことだ。

大理石でできた廊下を進み、突き当たりにあるゴシック調のとびらを見上げる。ジョーは深呼吸のあと、とびらに取りつけられた鉄の金具を右手に持ち、四回ノックをくり返した。

「入れ」

低くくぐもつた声かとびらの向こう側から聞こえてくる。同時に、とびらが自動的に開いた。

ジョーは胸をおさえたまま、〈大極殿〉の中へと歩を進める。

礼拝堂を彷彿とさせる室内。等間隔で設置された長イスの向こう側に祭壇が見えた。祭壇の前に座っているのは、青いハンチング帽を目深にかぶつたメサイアだ。いつもと同じように黒いトレンチコートのえりを立てているため、表情まではよくわからない。ハンチング帽とトレンチコートのすき間からするどい眼光が見えかくれするだけだ。

ジョーが入ってきたとびらのすぐ横にはリリーが立っていた。緊張した面持ちでメサイアを見つめている。ジョーも姿勢を正し、メサイアと向き合った。この部屋はひんやりして寒いくらいなのに、こめかみのあたりを冷やあせがゆつくりと伝つていく。

「……おいおい。そんなにしゃつちよこぼるな」

ほおづえをついたまま、メサイアがのどを鳴らして笑う。「しゃつちよこぼるな」は彼の口ぐせだ。「緊張するな」という意味らしい。

「……おまえたちはいつもそうだな。私のことがそんなにもこわいか？」

「いえ、決してそのようなことは」

即座に答えたのはリリーだった。いつもの強気な態度はすっかりかけをひそめ、ただただかままっているのがわかる。それはジョーも同じだった。

メサイアはいつまでもかたをゆらして笑い続けた。少しだけほつとする。どうやら、今日の彼はずいぶんと機嫌がいいらしい。

「まあ、いい。本題に入ろう」

そういつて、メサイアはコートの内側に右手を差しこんだ。

「時は満ちた。今週末、〈全人類ブルーデーモン化計画〉を実行に移す」



その言葉ことばにジューは息いきをのんだ。右みぎどなりからは言葉ことばにならない声こえのようなものももれる。リ  
リーもおどろいているのだらう。

そのときがいつかやってくることはわかっていた。その日ひを待まち望のぞんでいたのも事実じじつだ。でも

まさか、こんなにも早く訪れるなんて。

「これから計画の詳細をおまえたちに伝える」

メサイアはコートの中からいいねいに折りたたまれた用紙を取り出し、ひぎの上に広げた。手書きの地図だ。中心にえがかれているのはジェイルハウスだった。

「どうした？ もつと近くへ来い」

とびらの近くで棒立ちになったままのふたりに、メサイアが手招きする。ジョーとリリーはおたがいに顔を見合わせながら「先に行け」とうながし合った。

メサイアのそばに近づけるなんてまたとないチャンスだが、あまりにもおそれ多くて、正気を保つていられる自信がない。

「早くしろ。待たされるのはキライだ」

メサイアの口調がわずかに変化した。機嫌をそこねるわけにはいかない。ふたりはほぼ同時に背すじをのぼすと、今度はおたがいをおしのけるようにメサイアの前へと歩み出た。

バラとコーヒー豆が入り混じったような、刺激的な香りがただよってくる。祭壇でたかかれている香のにおいだろうか？ 頭の先がジンとしびれるような不思議な感覚に、ジョーは軽いめまいを覚えた。

「まずはここから始めることにしよう」

メサイアが地図の一点を指し示す。

「〈占見山〉……」

メサイアの指差した場所の名をリリーが読みあげた。

〈占見山〉は碧奥市のとなり——占見市の最北端にそびえる標高千五百メートルの山だ。中腹から山頂にかけては、この地域唯一のスキー場——へうらみスノーリゾート〉が広がっている。冬になると大勢のスキーヤーやスノーボーダーでにぎわうらしい。

今シーズンは雪が降るのが早かったため、まだ十二月になったばかりだが、今週末にオープンを用意しているそうだ。

「スキー場のオープンングセレモニーには毎年、大勢の人間が集まる」

メサイアの目がざらりと光った。

「先発隊の手によつて、すでに準備は完了している。スキー場にやってきた者たちはひとり残らずブルーデーモンへと進化するだろう」

「しかし……大丈夫でしょうか？」

リリーが不安げに口を開く。

おいおい。メサイア様に意見するなんて、一体どんな神経をしているんだ？

リリーの無鉄砲な物言いにジョーはハラハラせずにはいられなかった。

「なんだ？ リリー」

メサイアのあるどい眼光がリリーを射抜く。ジョーだったらあまりの恐怖に気絶していたかもしれない。

しかし、リリーは氣丈だった。

「〈全人類ブルーデーモン化計画〉は何カ月も前から進めてきたプロジェクトですよ？ ひよつとして、カマロも関わっていたのではありませんか？」

「ああ……おまえのいうとおりだ」

幸いにも、メサイアが気分を害した様子はなかった。

「だとしたら、計画を知っているカマロがじゃまをしてくる可能性もあるのでは？」

「かもしれないな」

メサイアはくくく……と不気味な笑い声をあげた。

「だが、心配はいらない。こちらにはこれがある」

そう口にするなり、メサイアは黒いかたまりをジョーに向かって放り投げた。反射的にそれを

受け止める。

ジョーが手にしたものは拳銃——いや、たぶんそうではない。銃口部分は宝石のようなものでふさがれていたし、グリップには小型のモニターがうめこまれている。

「ジョー。おまえが持つておけ。それがあればおまえは無敵だ」

「え——」

……無敵？

「〈全人類ブルーデーモン化計画〉をなんとしても成功させるのだ。期待しているぞ」

メサイアのありがたすぎる言葉と、絶えず脳を刺激してくるバラとコーヒーの混じった香り、全身がぞくぞくし始める。

全人類ブルーデーモン化計画。

なんと心地よいひびきだろう！

まもなく訪れるであろう至福のときを想像し、ジョーは快感に打ちふるえた。



## 2 銀世界へようこそ

冷たい風が顔をなでていく。

右を向いても左を向いても、白一色の景色が続いていた。天界に置いてあつた巨大な砂糖ツボがひっくり返つて、この世界を白くぬりかえたようにも見える。

グリム童話に登場するおかしの家を思い出し、ぼくは舌なめずりをした。目の前に広がる雪が全部、砂糖や生クリームだつたらサイコーなのに！

ぼくたちを乗せたリフトは、切り開かれたスギ林の真ん中を一定のスピードで上つていく。スギの木は前あしをめいっばいのばせば届きそうなくらい近いきりまでのびていた。ゆうべはとくにたくさん雪が降つたらしく、枝も幹もおしろいをぬりたくっている。

『すごい！　すごいね！』

美香ちゃんの胸にだかれながら、マロンちゃんはきよろきよるとあたりを見回し、興奮した口調でそうさげんだ。

今年の春に生まれたばかりのマロンちゃんはこれまで雪を見たことが一度もない。はしやぐの

は当然だ。

ぼくもそうだった。初めて雪を見たときのことを思い出す。空をふわふわと舞うそれは、縁日で見かけた綿あめみたいにやわらかそうで、でもさわるとびつくりするくらい冷たくて、つかまえようとしたりするとすぐに消えてしまつて……。次から次へと出現する雪を追いかけてはしやぎ回るぼくを見ながら、お母さんは幸せそうに笑つていたつね。

今はいないお母さんのことを思い出し、ちよつとだけ悲しい気持ちになる。

……いけない、いけない。ひさしぶりにマロンちゃんと過ごせるのだ。明るくふるまわなければ。

へうらみスノーリゾートの第一ベアリフト。ぼくはひろし君に、マロンちゃんは美香ちゃんにかかえられている。

ひろし君は白いヘルメットに、ラインの入ったシンプルなネイビーブルーのスキーウェア、美香ちゃんはうさぎのしっぽみたいな丸いかざりがついたピンクのニット帽と花がらのウェアを身につけていた。ふだんとは全然ちがう格好で、ふたりともものすごくカッコよく見える。

突然の横風でリフトが激しく左右にゆれたが、ぼくもマロンちゃんもドッグスリング——犬用のだつこひもでひろし君と美香ちゃんの胸もとに固定されているので落下する心配はない。



視線を上げると、真つ青な空が広がっていた。雲ひとつない快晴だ。西の空にかたむき始めた太陽がとてもまぶしい。

顔を前方に向けると、はるかかあなたに〈占見山〉の山頂が見える。真つ青な空と真つ白な山のおぎやかなコントラストをながめていると、どこか別世界を浮遊しているような不思議な気持ちになってきた。

「寒くありませんか？」

ひろし君が背中をやさしくなでながらぼくにきく。

ううん、ちつとも！

ぼくはひろし君を見上げ、小さくうなずいた。ぼくもマロンちゃんも、細くてやわらかい毛と太くてかたい毛——二種類の体毛に全

身をおおわれている。コートを重ね着しているようなものだから、寒さにはめつぼう強い。雪の上をはだして歩いたつてへつちやらだ。

「あ、あれ見て」

美香ちゃんが左ななめ前方のスキの木を指差した。そちらに目をやると、太い幹に茶褐色の鳥が一羽——頭を上、しつぽを下にしてとまっている。ガケをよじ登っているような格好だ。よほどツメがとがっているのか、幹からずり落ちてくる気配はまるでない。スズメよりも小さなからだつきだけど、雪でおおわれて周囲が白いため、その鳥はとてよく目立っていた。

「キバシリですね」

即座にひろし君が答える。

「キバシリ？ 変わった名前だね」

「よく見ていてください」

その鳥は左右に首を動かすと、幹をらせん状に移動しながら器用にかけて上がり始めた。

「木を走って上るからキバシリです」

キバシリはものすごい速さで移動し続け、雪の積もった枝にじやまされてすぐに見えなくなつてしまった。

「こんなに寒いものにもすごく元気だね」

白い息をはきながら美香ちゃんがいる。

「なにかも雪にうまつちやつてるのに……エサはどうしてるんだろう？」

「木の幹に生息する小さな昆虫類やクモを食べているのでしようが……これだけ雪が積もっていると、それも難しそうですね。たぶん、お腹を空かせているのではないでしょうか？」

ひろし君がそう答えた絶妙なタイミングで、ぼくのお腹がぐうと鳴った。マロンちゃんがぼくのほうを見てくすりと笑う。

『もうお腹が空いたの？ さつきお昼ご飯を食べたばかりなのに』

だって雪が生クリームみたいでおいしそうなんだもん——そんなことをいっただら笑われるに決まってる。ぼくは聞こえなかったふりをして、

『ほら。あそこを見て』

別の話題でごまかした。

スギ林がとぎれ、左手にゲレンデが見えてくる。

「おーい！」

ゲレンデからたけし君が手をふるのがわかった。となりに卓郎君とナオちゃんが立っ

る。たけし君とナオちゃんはスキー板を、卓郎君はスノーボードを装着していた。  
三人から少しはなれた場所に立っているのはペットショップに勤めるイズミさんだ。うわさ話  
の収集が大好きで、《町の情報屋》という異名を持っている。



イズミさんをふくむぼくたち六人と二匹は、リフト乗り場までいっしょにやつてきたのだけれど、犬をリフトに乗せるためには誓約書を書いたり、ドッグスリングを装着したりと、いろいろな面倒な手続きが必要だったため、ここにいるふたりと二匹はリフトへの乗車がほかのみんなより少しおくれてしまった——と、まあそんなわけ。

たけし君はいつもどおりののんきな笑顔をうかべていたが、卓郎君とナオちゃんは口をとがらせ、不満げな表情をこちらに向けている。理由はなんとなく察することができた。

ぼくはマロンちゃんと美しい景色をながめながらおしゃべりを楽しみ、ロマンチックなひとときを味わっている。リフトは特別な空間だ。どうせなら大好きな人といっしょに乗りたいたいではないか。卓郎君とナオちゃんが不機嫌そうにしている理由は、おそらくそういうことなのだろう。

ぼくたちを乗せたリフトがようやく終点に到着する。ひろし君はスキー板を、美香ちゃんはスノーボードをはいていたが、ふたりとも経験者らしく、リフトからスムーズに降りると、とくに苦戦する様子もなく、みんなの待っている地点まで移動した。

「なんだよ。ひろしや美香ちゃんもすべれるのか」

たけし君が不満そうにくちびるを突き出す。よく見ると、たけし君のスキーウェアは雪まみれになっていた。頭にかぶったニット帽も雪がこびりついて真っ白だ。

「スキーはチエルビニアでおじいさまに教おしえてもらいましたから」

かたに取りつけていたドッグスリングをはずしながら、ひろし君はさらりと答こたえた。

「チエル……なんだつて？」

たけし君がまゆをひそめる。

「チエルビニアつて……イタリアの？」

目を見開みひらき、おどろいたような声こゑを張りあげたのはイズミさんだった。イズミさんは毛皮けがわのコートを身にまとい、スノーブーツをはいている。そんな格好かっこうをした人は周りにひとりもいなかった。彼女かのじょだけがひどくういて見みえた。イズミさんいわく、子供のころからスポーツは大だいの苦にが手てのこと。せつかくゲレンデへやってきたのに、スキーやスノーボードを楽たのしむつもりはまるでないらしい。

「はい。おじいさまがトリノに住すんでいますので」

ぼくを雪ゆきの上うへに下おろしながら、ひろし君は表情ひょうじょうを変かえずにそう答こたえた。

「トリノにおじいさん？ まさかイタリア人じんつてわけじゃないよね？」

「いえ、生粋まきのイタリア人じんです。ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ——イタリアを代表だいひょうする有名ゆうめい

彫刻家ちやうくつかと同じ名前なまえだと、いつも得意とくいげに話はなしています」